

鷗外文学に対する三つの視点

井村紹快

序

鷗外と漱石の二人の作家が、明治文学はもちろん日本近代文学の中で占める重要さは、誰も異存はないであろう。漱石に関しては、江藤 淳の精密な論究が漱石研究の一つの新しい紀元をつくった。漱石にくらべると、鷗外研究の方はもの足りない。数ではいろいろ出ているが、江藤 淳の漱石研究に必敵するような決定的なものに欠けている気がする。

その中で、山崎正和の「森 鷗外 闘う家長」が、鋭さと新鮮さを見せた程度である。山崎氏の論文は読売文学賞を受賞した力作であり、創意と卓見にあふれ、官僚、軍人としての森林太郎と、作家鷗外としてのその作品群を結びつけ、分析、解釈してゆく手つきにあふなげがなく、一氣に人を読ませる迫力をもっている。鷗外文学を考えてゆく一つの新生面をひらいた功は、高く評価されるべきであらう。

森家の家長だけでなく、明治新国家の家長として期待された鷗外は、満身の力をふりしぼってその期待にこたえようとした。そこから鷗外の異常なまでの忍耐、自己抑制、奮闘が生まれて来た。だが、忍耐、自己抑制から生まれる鷗外の胸の奥の苦しみ、悲しみは、もともと身近かな肉親にさえ、本当に理解されないままにおわってしまった。その鷗外の悲哀と絶望が、多くの彼の文学作品にそのまま反映している、と山崎氏は考える。山崎氏の論理の展開はなめらかで、明快であり、鷗外文学を考える新生面を開いたものといえよう。

山崎論文は迫力に満ち、柔らかく鋭く人間鷗外の内面に立ち入って、そこから鷗外文学への解釈をひきだしてくる点はなかなか魅力に富んでいるが、読後じっくり考えなおしてみると、明快さがそのまま物足りなさと感じられてくるのは何故だろう。それは、解釈、分析の新鮮さはあるが、その新鮮さが、現代に生きる著者自身の鷗外文学のうけとめ方、評価の仕方という点にびたっと密着していないところからくるようだ。われわれが文学作品を読むとき、それが古典であれ現代文学であれ、現代に生きる生身のわれわれにどうかかわりをもち、どううけとめられたか、そのところをはっきりさせなくては、文学としてその作品を本当に読んだ、とは言えないのではないか。だが、そうした読み方には大きな落とし穴がある。作者の立場、作品の背景、時代を切りすてて読んでしまいやすいからである。このけじめをしっかりとさせないと、作品を語っているのか、自分の繰り言を述べているのかわからないものになってしまう。山崎論文は、その泥沼を器用によけて通っている。そこから明快さが生まれたが、同時にもの足りなさも生まれたと言えよう。

日本の近代文学も、すでに百年の歴史を経ようとし、その中の何人かは既に古典としての位置を確定されようとしている。漱石、鷗外は、そのばあい先ず筆頭にあげられる作家と考えられる。しかし、鷗外と漱石ではずいぶん異質の文学であり、われわれが彼らの作品をどう受けとめ、どのように評価するかは、評者の立場によって意見は大きく

分かれてくる。そこで私は、鷗外文学が今までどう考えられ、どう評価されて来たかを、代表的な意見を紹介しつつ、私たちの鷗外文学を考えてゆく方向づけ、位置づけのめどをつかむ試みとしてみたいと思う。

「性欲については兎に角、芸術に於ては、鷗外の意気は晩年まで衰へなかった。その悟性も学殖も、彼れの芸術を培養こそすれ、萎縮させることはなかった。

彼れは、無論天才型の作家ではなかった。しかし、詩作は片手間の仕事で『遊び』気分で筆を執ったことも多かったのであらう。非凡な作品、深刻な芸術は彼れの全集のうちから捜し出せないかも知れない。……しかし、近年の私は、明治以来の種々雑多の作品のうちでは、鷗外の作品を最も愛読している。その文章の的確明快なのを好んでいる。蕪雜の痕のないのを、読みながら快く感じている。作品を通して窺はれる作家の心境に何となく親しみを覚えてゐる。何よりも鈍味なところのないのが氣持がいい。」

「私は『書生氣質』以来の、明治の重なる小説は、一通り見ている訳であるが、自己の天分を完成した作家としては、鷗外が第一であったと思ふ。明治の重なる作家は、早世したためでもあったが、充分に自己を発揮し得なかった。独り鷗外は『舞姫』から『北条霞亭』まで、青年期から晩年まで、芸術を楽んで、天分と修養とを兼ね具へた自己相当の文学に安んじて、終りを全ふした幸福な文学者である。終りまで老衰の痕を残さなかった。」（正宗白鳥「森 鷗外」）

以上は正宗白鳥の「森 鷗外」の一節である。白鳥はいうまでもなく、日本自然主義文学の代表作家の一人であり、藤村、秋声と並んで大正、昭和を通してずっと文学活動が続け得た人である。創作活動がにぶると、批評の筆

をとり活ばつた文学活動を晩年までつづけ通した人である。該博な知識と読書量をもとに、直感の鋭さ、感受性の柔軟さ、ずばりと核心にふれた切れ味のいい批評は、多くの人人をひきつけた。批評の方法は印象批評であり、自分の直観をもとにした体あたりのなもので、実証的な方法はとっていないが、永年文学ひとすじに生きぬいてきた人の人生経験が行間になじみ出し、独得な批評文学となっている。

その白鳥の鷗外評は、鷗外文学の特質として、多くの人が賛美する点を簡潔に言い得ている。毒舌の鋭さが、白鳥の批評の魅力であったが、その毒舌もここでは全くかげをひそめ、「明治以来の種々雑多な作品では、鷗外の作品を最も愛読している」「終りを全ふした幸福な文学者」というように、鷗外、および鷗外文学は全面的に肯定され、うけ入れられている。さらに、永井荷風、佐藤春夫、小島政二郎というような人たちが、鷗外にふれて書いたものを見ると、そこには、賛美というより信仰と呼びたくなるような尊崇の言葉が連ねられている。

このように鷗外文学を高く肯定的に評価する態度を、戦後もうけつぎ発展させている例として、三島由紀夫の「鷗外論」をあげて見よう。

「鷗外とは何か？」

(中略)

鷗外は、あらゆる伝説と、ブチ・ブウルジョアの盲目的崇拜を失った今、言葉の芸術家として真に復活すべき人なのだ。言文一致の創生期にかくまで完璧で典雅な現代日本語を創りあげてしまったその天才を称揚すべきなのだ。どんな時代になろうと、文学が、気品乃至品格という点から評価されるべきなら、鷗外はおそらく近代一の気品の高い芸術家であり、その作品には、量的には大作はないが、その集積は、純良な檜のみで築かれた建築のように、一つの建築的精華なのだ。」(三島由紀夫「作家論」――森鷗外)

『雁』を読み返すたびにいつも思うことであるが、鷗外の文体ほど、日本のトリヴィアルな現実の断片から、世界思潮の大きな鳥瞰図まで、日本の小道具から壮大な風景まで、自由自在に無差別にとり入れて、しかも少しもそこに文体の統一性を損ねないような文体というものを、鷗外以後のどの小説家を持ったかということである。(同上)

いつもの三島流のべたべた油くさく、氣どった文章は閉口だが、この三島の鷗外賛美は、戦後の賛美論の一つの代表的なものといつていいだろう。「完璧で典雅な現代日本語の創造」「近代一の気品の高い芸術家」というように、最大限の讃辭が鷗外文学に呈せられている。それはある意味でその通りであらう。「典雅な日本語の創造」という点では、鷗外文学を否定的に批判する立場の人も鷗外の功績を無視することは出来ないであらう。しかし、「近代一の気品の高い芸術家」というような言い方は、「気品」という抽象的、主観的なものの具体像は、見る人の立場によって相当異ってくるから、鷗外を「近代一の気品の高い芸術家」と見るのには、かなり異論が出そうである。それにして、中学、高校の国語教科書に鷗外の作品がかならずといつていいほど採用されているのは、大体三島の観点から採用されているのであらう。だから三島の鷗外論は、相当賛同者の多い、一つの考え方の代表と見てよからう。だが、一般的に認められるということは、そのまま正しいことにならないのはいうまでもない。

こうした印象批評風な鷗外論をもう一步すすめて、「淡江抽斎」等で鷗外のとった徹底して実証的な史伝小説に、方法論としての独創的な新しさを見ようする考え方が生まれて来た。たとえば伊藤整の森鷗外論である。

「それは所謂小説らしい角度から人生を眺めたり描いたりすることを放棄し、ただ記録者として作者なる自己を置こうとしてゐることである。その態度で押しとおして行くことは、どういふ自信から来ているのかという驚きの念でもあった。(中略)

私は現在の日本の小説の一般の書き方に根本的な疑念を持っている。そして私は鷗外がこの種の作品を書いた動機の中に、やっぱりそういう、時の小説一般のあり方に対する疑問があったらしいことを感じて一層興味を持った。つまり鷗外は、人生を小

説風にやつすことを極度に嫌ったのであろう。その結果、人生の事実を、小説らしいやつし方から全く洗って、修飾や外衣や説明なしの事件そのまま並べようとしたのであろう。」

「私はやっぱり一種の驚嘆を感じた。こう戸籍しらべのような書き方で描かれた人生が、とても小説らしい書き方ではとらえられない深さまで人生を抉り出しているからである。鷗外は勿論自分の考証をたのしみはした。しかしそれ以外には彼は作家としての我侪を何一つ読者に押しつけなかった。退いて記録者たる地位に止った。そして彼のその退き方が正しかったことは、彼が退いただけ人生が作品の中にしっかりと歩み入っていることによって明かである。」（伊藤整全集十九）

ここで伊藤整は、自然主義レアリズム以来、日本文学がどうしても脱け出せなかった写生、描写から脱け出している鷗外の「北条霞亭」等史伝物の、方法としての新しさを改めて見直そうとしている。作者の描写力や観察力によるのではなく、作者の主観を消し去って、記録的なものを羅列することによって、生き活きとした人間像をうかび上らせる事に成功した鷗外の方法を重視しようとしている。

こういう面から鷗外を高く評価しようとする考え方は、中村光夫「私小説論」等にもうけつがれ、歴史的に日本の近代文学を考えてゆこうとする中で、更に精密に文学方法論として再検討されていった。日本の自然主義文学が、西欧の自然主義文学とは似ても似つかぬ「私小説」の袋小路に落ちこみ、それが大正、昭和の文学に深い影をつくり、日本文学の新しい展開に大きな障害となった。そのとき、漱石と鷗外の二人の作家が、その西欧文学に対する深い教養から、自然主義の限界をはじめから見通しており、自然主義文学の外で、全く別種の文学を創造し得た面が大きく再評価されようとしたのである。白鳥や三島は印象批評風に鷗外文学を賞揚しているのだが、方法論として鷗外文学は自然主義レアリズムをつきぬけたものであり、日本の自然主義のゆきづまりをはっきり見越したところで創造された文学として、伊藤整により鷗外文学が、あらためて見直されようとしたわけである。

二

しかし鷗外も、いつも高い評価と讃美の声をうけていたばかりではない。すでに「舞姫」の出た当時、石橋忍月をはじめかなり鋭い批判が出ていたし、明治四十年代へ入って活発な活動を再開してからも、自然主義派をはじめさまざまな攻撃的批判を受けたようである。晩年の歴史小説には、高等講談というレッテルがはられたりした。しかし同時代に出た批判には、作者の内面にくい入る痛烈な批判はほとんど出なかったと言っているようにだ。だからそうした批判に対しては、批評する者よりはるかに高い位置に鷗外がいて、幼稚な批評を上から見下していたかっこうである。といって鷗外という人はつまらぬ批評だからといって無視することの出来ぬ人であつたらしく、時には茶化するような言葉でそうした批評に、余裕はもちながらもいちいち応答していたようである。鷗外文学に真正面から切りこんで、その文学的地盤を根底からゆるがすような評価は、鷗外歿後ずっと後に、それも第二次世界戦争後になってはじめて出はじめたと言っている。その代表的なものの一つが、中野重治「鷗外 その側面」である。

中野重治の鷗外論は痛烈ではあるが、中野氏が鷗外を軽視しているわけではない。むしろ中野重治は鷗外文学を重視し、ある面では鷗外文学に深く傾倒している。そのことは、谷崎潤一郎、永井荷風、志賀直哉、正宗白鳥等の名を具体的にあげ、「この人たちをさきの二人（漱石、鷗外）の人に比べてみると、大きい小さい、うまいまいずいということとは別に、今日のこの人たちが、すくなくともあの二人と同じ意味で偉大だとは義理にもいえないと思うということ」が自然に出てくる。（「漱石と鷗外との位置と役割」という言い方までしていることではっきりする。谷崎、荷風、直哉、白鳥は日本近代文学の中で第一級の作家たちである。その人たちと較べても、比較の出来ない偉大な作家と、中

野氏は鷗外を見ているわけである。では、どの点で鷗外は、他の作家たちと違った偉大さがあったというのか。中野氏は、鷗外は「勲賞がほしくて、錢がほしくて、また世間的な名譽がほしくて」作家活動をしたのではない、という言い方もしている。では何のために鷗外は創作したのか？

「かれら（漱石、鷗外）自身が、かれらの文学を社会と道德とに結びつけようとして常に努力していたこと、すすんでいえば、社会上・道德上・歴史上の問題解決のためにこそ、かれらによって文学がえらばれたのであったこと一つを指摘したい。それだから、かれらは、いわば初めから、人生の教師として出発し、人生の探究者として出発していたのであった。かれらは、主として人にたのしみを与えるために文学に出発したのではなかった。かれらは一つの引き合う職業として文学者をえらんだのではなかった。一つの人生として、そこでたたかう人生の場として文学はかれらにとりあげられている。」（漱石と鷗外との位置と役割）と中野重治は強調する。これは、文学を文学たらしめるいちばん素朴で純粋な原則である。しかし、いちばん素朴で純粋な原則を守りとおす、ということとはきわめて困難なことである。その点漱石や鷗外には、基本的姿勢にいささかのゆるぎもなかった点を、中野氏はまず高く評価するのである。又、鷗外は政治と文学の両面で大きな仕事をしたが、政治面では、「男爵にもならず、元帥にもならず、大臣にもならず、貴族院議員にさえならず」にそれをやっている事を認めている。つまり、政治的な面でも、文学上の仕事でも、鷗外が私利私慾のために活動したことは一度もなく、金銭、名譽等にはもっとも恬淡な人であったとしている。

又、「羽鳥千尋」「ながし」「鍬一下」等の作品は、「牛鍋」「電車窓」のすじをひくものとして、「日日はたらいて生きて行くもののがた」をえがいたものであり、それを受け入れる用意を常に鷗外はもっていた、「鷗外は、人が艱難をしのいで成長して行くがために心から同情する人であった」と中野氏は見ている、樋口一葉の「たけくらべ」を激賞し、一葉の死の直前には青山胤通をして一葉の長屋に往診してもらうようはからったのも、鷗外でなければ出来

なかったことであらう。「二人の友」で見ても、逆境にめげず勉強してやまない人には、身分年令を問わず丁重に応待し、必要とあらば助力の手をさしのべるのを惜しまなかった人であったことがわかる。「鷗外という人は、個人としてはいい人であったという風なことが特にこれらの作品についていえるのではないか」と中野重治は見ている。

ここまで見て来たところでは、鷗外は一人の人間として、個人的には非のうちようもないりっぱな人というほかないうである。ではどの点で中野重治は鷗外文学を批判し、はっきり否定しようとするのか？「初めから、人生の教師として出発し、人生の探究者として出発し」、「一つの人生として、そこでたたかう人生の場として」文学活動をしてきた、のであったとすれば、問題は、人生の教師、人生の探究者としてのあり方にあるであらう。たたかう人生の場として文学をとりあげていたとすれば、誰のためにどのようにたたかったのか、そのたたかう方に問題があるだろう。人生の教師としての鷗外、文学を通してたたかう人としての鷗外が、何に對してどのようにたたかったと中野重治は見るのか、その点をたどってみたい。

「自然主義の根本弱点として啄木はそれが国家権力との衝突を（しかも理窟つきで）回避したことをあげた。しかし自然主義のそれ以外の弱点を知りつくしていた鷗外は終にこの問題にはふれなかった。そして、理窟つきでしか理窟ぬきでしかは別として、絶対に国家権力との衝突はこれを回避した。彼はもう一歩すすみさえした。衝突されるべき権力をその『純粹』な努力でまもり、自然主義への自己對置を越えて、自然主義を生んだ流れへの歴史的自己對置へ行った点で自然主義からさえ後退して去ったのである」

（「鷗外位置づけのために」）

中野重治独得の言いまわしで、少々わかりにくくなっているが、啄木の指摘した自然主義文学の最大弱点である「国家権力との衝突回避」という点には、鷗外の自然主義批判は最後まで触れなかったし、鷗外自身が「国家権力との

衝突回避」をし通した。それだけではなく、本来の自然主義がもっていた「個人的社会的真実の追求」という立場に對置した立場をとった結果、自然主義からさえ後退してしまった、というのである。多くの自然主義作家たちより、はるかに早く、深く自然主義文学になじみ、高い教養をもっていた鷗外が、なぜそうなったのか。

そこで中野重治の言葉をもう一度借りよう。中野氏は鷗外が家族の誰からも敬愛されていたことを指摘する。森於菟、森潤三郎、森茉莉、小堀杏奴、小金井喜美子というような人が、兄として、父としてこの鷗外について書いているが、それらはすべて「深い尊敬とこまかい愛情」がゆきわたってにじみ出ている。それは氣持のいいもので、「肉親によって書かれたものだけで一つの花輪」がままれているようだ、と中野氏はいう。それは漱石が夫として親として、妻や子供たちに、かならずしもいい夫、いい父親ではありえなかったのと、対照的と言ってもいい。

「しかしそこに、古いものに対する鷗外の屈伏、あるいは妥協ということも私はあったと思います。必ずしも家族制度と限り必要はありません。家庭生活、官吏生活、それから政治生活、すべてを貫いて結局のところ鷗外は、古いものに屈伏しています。従順にそれに従っています。生涯をつらぬいて鷗外は、古いものを守ろうとする立場を守っています。むしろそこに、いろいろの、またなかなかばげしい内部衝突がありますが、この衝突を、行きつくところまで行きつかせることを鷗外はしません」

(鷗外位置づけのために)

「そこで、鷗外で目立つ第二の問題ですが、それは、古い權威を維持するため彼がいかに奮闘しているということだと思えます。これは、話が多少面倒になりますが、森茉莉さんの言葉をかりれば、鷗外の思想の根底に『一片歌々たる皇室尊崇の念が確乎として存在』したということに関係があります。やはり必ずしも、皇室とか天皇とかいうものには限りませんが、徳川時代から引きつづいて来た日本の封建的なもの、明治になって再編成された封建的專制的なもの、これを維持しようため、鷗外がいかに奮闘したか、いかに五人前も八人前も働いたかという問題であります。

このことでは、鷗外はさまざまな改革をもやっています。宮内省ないし帝室博物館の問題、陸軍軍医団の編成の問題、東京医学會ないし日本医学会の組織の問題、政府の文芸政策ないし芸術作品にたいする検閲の問題、革命運動にたいする弾圧政策の問題、こういう問題で、鷗外は、広い知識と高い見識とを働かして、なかなか立派な意見を出し、またそれが実行されるよう舞台裏で事を運んでいます。文部次官に手紙をかく。山県有朋に特別に会って話をする。そういうことをやり、またそのため、人と衝突したり、陸軍次官から叱られたりなどもしています。では何のために鷗外がそれほど働いたか。日本の民主化をおさえるため、日本の民主主義革命にブレーキをかけようとして五人前も八人前も仕事をしています。民主主義革命への日本内部の動きと活力、それをおさえるには、上からの力をふんだんに強め、不断に新しくせねばなりません。この上からの力を、粗末なものから精密なものに、低級なものから高級なものに改めて行かねばなりません。この支配する力を思想的哲学的に裏づけ高めること、ここに鷗外の五人前も八人前も力が発揮されたということ、これが第二の問題、また非常に大事な問題だと私は考えます。」

(「鷗外位置づけのために」)

このように中野重治は一気に彼の鷗外文学否定論の核心に入ってゆく。さらに中野氏は、彼の論旨を次のように進める。

「労働者階級の成長を明らかに勘定に入れて、さまざまな社会政策を改良主義的に考え、その結果、改良主義から天皇制社会主義(?)へ行き、排外・全体主義の極右政策に出ようとした一人の人によって近代日本文学が最も高く代表されているという事実、これを日本の労働者階級とその文学的選手団とから隠そうとするのはよくないことであって悪いことである。」

(「鷗外と自然主義との関係の一面」)

「天皇を天皇制の中心として残そうという試みと、同時に天皇をいくらかでも人間的ものとしようという試みとの、分かった空しい統一のための鷗外努力は、今となっては同情をもって眺められるべきものかも知れない。ここでも古い意味での『忠

義』という言葉をつかえば、鷗外は、明治・大正の全期間を通じて、その『忠義』のために金、位、爵位などを得たすべての人よりもっと純粋な意味で『忠義』であったとも言えよう。これは、強かった鷗外の弱点としての美点であった。」

（小説十二篇について）

「ただ『阿部一族』が『興津弥五右衛門の遺書』などから始まる武士ものへの出発をなしていることは、知れわたったことであるけれども力を入れていっておかねばなるまい。天皇の死によって明治は終りつつあった。大正という年号がつくられたが、世界は第一次大戦にむかつてすすみつつあり、国内には社会問題、労働問題が力をもって生じつつあった。資本家のための学者としての法学博士添田寿一などは、労働者と資本家とのあいだに『主従の關係』を復活させねばならぬということをいい出してさえいた。そういう時期に、鷗外が、木下李太郎の言葉をかりれば、『徳川時代の武士道』に『始めて最高の芸術的形式』をあたえ、それによって鷗外自身、『徳川時代の武士道』の『最善の説明者』となったのである。」（小説十二篇について）

「その美しい晩年を、非合理的なものの合理化のために奮闘せねばならなかったかつての合理主義のための戦士の姿はいましい。おそらくわれわれは、ここで、逍遙の没理想論にたいしてイデエをかかげた若かった鷗外を思いうかべ、今や同じその人が、国の権力とそれに索かれる多数者の心理とに追隨して、もつとも卑俗な没理想論におちいっただけでなく、すすんでそれを固定化して、敵によってそれが大きく崩されるのに先手を打とうとしている姿を見いだすわけである。すぐれた鷗外は、ここで教師としてもう一度大きく登場してくるが、この教師は、もはやあらゆる区切りを取りはらって人生に直面する生活の探究・開拓における教師ではなく、哲学的に最も卑俗な折衷主義者としての汁気のない修身教師である。」（漱石と鷗外との位置と役割）

引用がやや長くなってしまったが、以上で中野重治氏の鷗外文学批判の論旨は大体理解していただけたかと思う。要するに中野重治は、鷗外の偉大さ、ぜに金のためでない文学への純粋な情熱、個人としての人間の立派さを高く評価する。しかし、鷗外文学の持っていた性格、その保守性、反動性を中野はぜったい許容出来ないものとして鋭く

指摘する。

中野重治は、文学青年、左翼運動、投獄、転向、そして戦後の再入党、共産党参議員議員と、屈折した青年期、壮年期を苦汁をなめて生きぬいた人である。それは趣味や偏向などではなく、自己に誠実に常に民衆の立場に立って考えれば、中野氏にとっては、たどらざるを得なくてたどった必然の道であつたろう。中野重治は、転向後出獄したあとも、戦争末期執筆を禁ぜられるまで、許されるぎりぎりの範囲で執筆をつづけ、自分の良心を守りつづけた。その点で読者の信頼と共感を勝ち得ている。ここに引用した文章は、すべて昭和二十年代に書かれたものばかりである。昭和二十年まで強制された過酷な言論思想の弾圧のたがはずれ、永年胸中にあたためられていた鷗外に対する考えが、はじめて表現の自由を得て、はき出されたものである。

この中野重治の鷗外論を読んでいると、平野謙の「中野重治」の一節が頭に浮かぶ。

「その（中野重治の）文学的核心をなすものは、いわば自己韜晦によつてしかうまれぬリアリティ 顕現にはかならない。文学発展の道において、私はこのような資質をこそ尊重したいと思う。（中略）しかし、融通のきかぬ野暮ったい日本の小説家にこのような資質はまれである。ただ私は永井荷風―佐藤春天―中野重治という近代日本文学史上孤立した一系譜を（その淵源に森鷗外をすえてもいい）思い描いて、ひそかに心慰むばかりである。

ここにこそ文学の本道があるのではないか。」（平野謙「中野重治」昭二五・五）

中野の文学観では、鷗外が否定されるのだから、荷風、春夫が否定されるのはいうまでもなからう。戦時中に書かれた評論ではあるが、その中野の文学資質を、鷗外、荷風、春夫につながるものと平野謙が見ているのは、鋭い目と感ずるとともに、興深く感ずる。

中野重治の鷗外文学批判が、正当であるかどうかを性急に論ずるのは措くとして、中野の文学資質に鷗外の糸をひ

くものがある事はたしかであろう。中野の評論が、昭和二十年代というやや異常な時期に書かれたものである事をさし引いて考えても、この鷗外文学否定の論調には、相手に有無を言わせぬ氣負い立った調子がある。そして、何度くりかえして読んでも、鷗外に対する正当で高い評価と、それを一気に根底から否定してゆく結論には断絶が感ぜられる。

伊藤整が高く評価する文学手法としての新しさの中に、中野重治はもっとも否定すべき文学的本質を見ている。これは、整と重治の立場の相異、文学観の相違だけでは片付けられない重要な問題を含んでいると思う。その点も、あとでじっくり考えてみたい。

「八鳥千尋」「二人の友」「花子」等の作品群を書き、樋口一葉の文学的才能を最大限の讃辞で称揚した鷗外は、努力する人、すぐれた才能をもった人には、相手の地位、身分にこだわらなくつきあいもすれば、ちゅうちょなく相手の長所に敬意を表した。その点、一般の高級官僚とは全く別種の人であった。しかしその反面「雞」や「金貨」に出てくる「馬丁」や「八」のような人物をえがく時、鷗外は上から憐れむべきものとして庶民を見ている。主人の目をぬすんで米、みそをかすめとる馬丁、ひとり者の主人の留守を幸いに米を母親に持ちかえらせる女中、外国の銅貨を金貨と思いこんで盗み出してつかまる八、そうしてその場合、主人公の高級将校は、彼らを機械的に処分したり、法のさばきにゆだねたりはしていない。盗人は説論してにがしてやり、米、みそをごまかす使用人は、相手を傷つけないうちで処置している。

高級官僚としては珍らしい寛大さであり、賢明なとりはからいと言つていい。ただ氣になるのは、これら無知で、善良で、あるばあいにはこすからい庶民に対する作者の眼である。あわれみと、軽侮の感情がそこには感ぜられる。明治三十年代の日本の庶民たちの多くは、おそらくここに描かれていた通りであったにちがいない。「八鳥千尋」や「二

人の友」に出てくるような、困苦に耐え、学問修業にはげんだ人たちは、何万に一人という特殊な人だったにちがいない。こうした特殊な人たちに対する敬意の念とは、まったく別種の人間を見る目で作者は一般の庶民を見ている。時代と社会のありようで、名もない庶民がどんな人間的变化をし、どんな力を発揮するかも知れない、というようなことは、鷗外の視野の全く外の事であったようだ。その点、中野重治のような批判の出て来る根拠は充分ありそうに考えられる。

しかし、中野重治はいさか結論を急ぎすぎたようだ。鷗外の高い評価と、真向みじん、といった否定とがびったり緊密に結びついていない。そこに中野の論旨に最後まで素直について行き切れないものが残る。軍医総監や帝室博物館長になった鷗外は、その発言や発言の仕方、しぜん抑制をうけなければならなかった。それにもかかわらず、鷗外はいろんな形で言論、思想の統制に対する反対の意向を表明している。「帝室主義だった」「皇室尊崇の念が確乎」としていた、という身内の人の証言も鷗外をあらぬ批判や、攻撃から守りたいため出て来た言葉ではなかったか。皇室尊崇の念が薄かったら、危険思想、社会主義者、非国民というレッテルがはられかねない風潮が、大正から昭和へかけて波をうって激しくなっていたからである。そうした中で、鷗外の表現は自ら屈折した形をとらざるを得なかった。「妄想」「かのように」「藤棚」をあげて、軍事的・資本家的・地主的・身分的な支配階級が自己陣営の再武装をこころみた最高の結晶と、中野重治は断定する。この中野重治の意見が間違っているとは思わないが、屈折したものを一挙に切り捨ててしまった断定のようにきこえる。

この中野重治とは根本的に異なる鷗外評価をしながら、ある点で中野重治にほとんど近い見方をしている人に石川淳がある。石川淳の「森鷗外」（岩波文庫一九七八、七、一）は、批評家としての石川淳の力量の並並ならぬものであることを感じさせる。石川淳の鷗外論も、全体を通して鷗外文学を高く評価している。評価というより、深い尊敬の念と

言った方がいかにも知れない。その中で、鷗外最晩年の「古い手帳から」をとりあげて、石川淳は次のように言っている。

「すでに手記である。自家の覚書の意味もあつたろう。だが、発表は明かに読者を予想している。これは鷗外の他の文章と同様に啓蒙的な意味があつた。ところで、これは鷗外の他の文章とちがつて、別に読ませるべきある相手を想定しているように思われる。行文の間に作者みずからそれを意識しつつあるけはいを示している。その相手とはなにか。敵である。敵とは、社会主義共産主義である。『古い手帳から』は鷗外の社会主義共産主義に対するはなはだ鷗外的な攻勢であつた。作者は進んで敵の短を攻め、ただちに敵の非を打って、これを破そうとはしない。また自分の思想を金びかに塗り上げて、敵をして顔色なからしめようともしていない。作者はただ公衆の面前で、いわば敵に聞えよがしに学者ふうのひとりごとを洩らしている。そして、もし敵が来てこの筆陣にふれると、ついその短と非とを分析されてしまうような仕掛になっている。ただし『古い手帳から』がよく実際に敵を破する底のつよい作用をなしているかどうかは、別のはなしである。」

「古い手帳」は鷗外の死の直前まで書きつづけられたものであり、ギリシャ、ローマからはじまって、古今の思想、哲学にふれ、啓蒙的であると同時に、あるべき人生観、芸術観の方向づけを試みようとしたものではなかったか。それを書きおわらぬうちに、鷗外の死により、それは中断されてしまっている。すでに死の病魔に犯されながら、いささかの乱れもなく、これだけのものをまとめあげようとした力は、超人的といつてもいい。それにしても、鷗外の中の何がこうした文章を書かせるべく鷗外をかりたてたのか。それはやはり、最終的には、社会主義共産主義に対する危機感にあつたのではないか。その点、鷗外は成功しているか。石川淳は次のようにつづけている。

「だが、一たび文学の場を離れて、世間一般に流行をきわめる某々社会思想に対すると、不思議にも巨人鷗外はたちまち流俗の小市民に縮まったような観を呈する。みごとな柔軟性はどこやらに喪失されて、いやに硬くなったように見える。影が真黒に

限どって来て、速さが死んだように見える」。

「文芸の主義」と題する短文で「学問の自由研究と芸術の自由發展とを妨げる国は栄える筈がない」と喝破した鷗外は、昭和十年代に青年期をすごした私らには、よくも大胆に、と感ぜられるような同類の發言をいろんな形でしている。しかし、鷗外の学問、芸術の自由は、通俗モラリスト、社会改良論者としてまでの自由であり、事が社会主義、共產主義にふれると、鷗外の姿勢は自然にぎごちなくなり、硬化してゆく。

『古い手帳から』に於て、鷗外は執つて下らない。ただし、これは漠然とはしていない。旧に依つて、げんにこうしている自分よりほかのものではありたくないという氣持を押し通している。そして、敵は社会主義共產主義である。しかし今や鷗外の進退駆引はかつての『妄想』に於けるがごとく流通無礙ではないかのである。どうも敵の陣立を『一篇の抒情詩に等しいもの』と觀じ去つて晏如たりえないかのである。もちろんそれは『自分を酔わせる酒』ではなく、また『同情を有せない』には相違ないが、といつて『そんな思潮には触れずにしまった』けしきとは見えない。決して『懶眠の中』に敵襲をこうむつたのではなく、明かに醒覺しつつ、立ちながらに敵の来るを待つおもむきである。これほど一事に関心を集中して、思想上の敵を意識し、敵の形勢を遠望しつつ、黙々としてひとり隠れたる論陣を布いている鷗外の姿を、わたしはかつて知らない。」

『右の鷗外の資本家觀労働者觀をつかまえて、鬼の首でも取つたように、ばかばかしい批評の真似事などはしない。このことばと、たとえば『だれでも金持はやっぱりうらやましいにきまつてゐる。うらやましかつたら、早く成功して貧棒人の足を洗えばいい』というたぐいの市井人の生活感情を露呈したことばと、(プラトンを抜きにすれば)その性質に於てどうちがうか。鷗外は市井人とともに主義はいけねえ。あんなものはいけねえ。どうしてもいやだ』といつてゐるだけのことである。往年流行したなんとか主義の末輩のもつとも愚鈍な乳臭兒といえども、一つ覚えの教典を頼りに、鷗外説よりもすこしはましな資本家觀労働者觀を立ててみせることは容易であつたらうが、この生活感情を殺すことは何人にも困難であつたらう。それにしても、明治大正を

通じて第一等の文学上の事業を成就し、『天が下の知者』と称された人物が晩年みずから病を意識し、死に面しつつ、最後に筆をすすめた文章の中で、陽に示した社会観の一端がこれで、陰にちらつかせた究極の生活感情がやはりこれであったとは、ひとをして悚然とさせる。知識の木の葉を重ね着した奥の、このいたいたい老文豪のはだかの姿に対して、わたしは傷心、眼を掩うほかない。」

鷗外ほどの高位高官に達し、最高のエリートコースをまっすぐにたどった人が、社会主義共産主義をあからさまに肯定したとしたら、むしろ不思議といつてよからう。また、そうした態度の許される時代でもなかった。だが一面で鷗外は、日本の近代化のため因襲とたたかってきた人である。たとえば「ロビンソン・クルソオ」の翻訳に寄せた序文に、客、訳者、主人の会話の形で書きすすめ、訳者の言葉として次のように述べさせている。

「そこでロビンソンですが、只今承ったところでは、不忠不孝の人を書いた本だそうですが、兎に角僕なんぞは好きな本で、今度訳するにも好んで訳したのです。僕は一体創業ということが好きです。どうせ新しい事を起すには、周囲に反抗して、因襲を破って行くのです。それですから、きっと親の同意を得てからする。きっと国家の承認を受けてからすると云ふ訳には行かないのです。漢の高祖の天下を取った話が好きです。ナポレオンが好きです。釈迦やキリストが好きです。マルチン・ルテルが好きです。詰まりそう云ふ人物のする事を原始的に考へて見ると、ロビンソンになるのではないでせうか。」

もちろん鷗外は、この訳者の弁に鷗外自身を代表させる形では書いていない。しかし、鷗外の一面にひょうように強く、こうした考えが働いていたことには間違いない。鷗外の仕事の大きな原動力として、新しい時代への創造の意欲がはたらいていたのはたしかである。

その鷗外の足どりが急速に緩慢になり、果ては新しい時代の創造へつき進もうとする人の行く手をはばみ、抑制しようとする。中野重治は、その点を大きくクローズ・アップし、高びしやに鷗外を「排外・全体主義の極右政策

に出ようとした人」ときめつける。石川淳は、中野重治とは全くちがうが、社会主義共産主義に対すると、終始端然としていた鷗外が、とつぜんとり乱したようになる、その点をいたわりの目をもって認めている。同じように、鷗外文学の中でもいちだん高く評価する歴史文学の中で、「大塩平八郎」だけを石川淳は愚作とみなす。それは、鷗外の社会主義へのこだわりが、この作品の格を他の歴史文学と同格に論ずることの出来ないものにしてしまっている、というのである。

三

以上鷗外文学の讚美論と否定論を紹介してきたが、ここにまったく別種の鷗外論が出てきている。鷗外は終始一貫して社会主義を信じていたし、きたるべき社会が社会主義社会であるという考えにゆるぎはなかったという主張である。それは「鷗外その青春」（昭五一、十二、十 角川書店）を書いた飛鳥井雅道である。

「中野重治はつづけて書いた。『日本の労働者階級は、私の考えでは、漱石をよむ程には鷗外を読んでおりません。これは一面自然ですが、やはり大きな不十分だと思えます』と。

わたしは中野重治のこのことばをそっくりそのままうべなうものではないが、それにしても中野重治がこうのべながら、『鷗外その側面』（筑摩叢書）という大部な本を書かねばならなかった鷗外への傾倒ぶりと拒否のしかたを、うけついでゆかねばならないと、この四半世紀のあいだ思ってきた。そして、一九七六年のいま、わたしは文字どおり苦く笑わねばならぬ。次々に刊行される鷗外研究において、こうした中野重治の立場はまったく問題になっていないし、意識的に忘れることが学問的であるらしい事実に接するたびに。」

と、飛鳥井氏はその「はしがき」に書いています。中野論文が、鵬外文学に対する深い傾倒と拒否、を内容としていることは、前に紹介したとおりである。そして、鵬外文学を文学として真正面からうけとめようとすれば、避けて通ることの出来ない重要な問題を中野氏が提出していることはたしかである。多くの鵬外研究が、器用に中野論文を避けて通っている中で、飛鳥井氏は真向から中野をうけつごうとし、中野をのりこえようとする。中野重治が「全体主義の極右政策に出ようとした人」と見た鵬外を、飛鳥井氏は社会主義を信じ、その信念にゆるぎのなかった人と見直そうとしている。この唐突な結論を飛鳥井氏はどのように導き出したか。飛鳥井氏の言葉をたどって見よう。

「鵬外の社会主義対策建議だけをとってみれば、なるほど中野重治がかつていったように、『古い支配勢力の芸術的選手』（鵬外位置づけのために）とうつるかも知れない。だが、鵬外の社会主義対策は、くりかえすが社会主義を必然とみなすところから始まっていたのである。そこには社会主義に対する共感すら生まれていた。

『社会主義』と書いていいすぎだとひとがいうならば、彼の晩年の『阿部一族』『最後の一句』『大塩平八郎』らを読めば、そこには機構のみ発達し、動きがとれなくなった封建官僚への激しい批判をだれしもが読みとるであろう。『大塩平八郎』が革命的大塩像でなく、鵬外が使った資料からすらもゆがめられ、単なる不平者大塩におとしめられているという批判は当然おこっているが、そうした鵬外批判を展開する論者たちは、なぜ鵬外が大塩平八郎を作品の主人公にすえなければならなかったかという、かんじんかなめな点をすっかり見おとしていのである。鵬外は大塩平八郎や阿部家のひとびとを滅ぶべきものとして描いた。ちょうど彼が幸徳秋水を滅びに急ぐものとしてながめていたように。だが彼は、社会主義に共感したように、封建制への叛逆者に共感していた。」（同書「鵬外と林太郎のあいだ」）

封建官僚への激しい批判は、鵬外自身の行動にもあり、鵬外文学の主要テーマの一つになっていることは、中野重治はじめ鵬外を論ずる人は誰しもみとめているところである。しかし、「阿部一族」や「大塩平八郎」をひきあいに

出して、封建制への反逆者に共感していた、と見る事はどうか。まして、社会主義に共感した、などどこから言えるのだろうか。

「鵬外・森林太郎は無私そのものだった。彼は社会主義が近代社会に必然であることを悟っており、それに不賛成だったからこそ、山県有朋に具申し、取締りについて、単なる弾圧のみでない解決策を説こうとしていたのだった。直接の資料こそないが、第二次岩波版『鵬外全集』の月報には、東大で鵬外が社会主義について論じた記録はいくつかあり、それは社会主義がおこる必然と、その解決法についてのべたものである。証拠としては、明治四十四年、『大逆事件』の被告たち十二名が刑死したのち、ただちに設立された『恩賜財団・済生会』なる転向者用の厚生施設の創立に、陸軍省の森林太郎ではなく、山県有朋のブレインとしての鵬外が参画していた事実をあげればよいだろう。(中略)

山県有朋のブレイン・森林太郎と、平出修への助言者・森鵬外のあいだは、表面上あきらかに矛盾するかのように見えるだろう。だが鵬外は無私に徹することによって、それを矛盾とは少しも感じなかった。社会主義が必然であるなら、社会主義は合理的に、かつ無駄なく、不必要な犠牲を出すことなく解決されねばならなかった。」「(鵬外と林太郎のあいだ)」

中野重治が、鵬外の反動化、反社会主義的行動の証拠の一つとしてあげる「済生会」の設立を、飛鳥井氏は、社会主義を助けようとした行為と見る。又、鵬外は、「社会主義」が合理的に「不必要な犠牲を出すことなく解決されねばならなかった」と考えていたとする。

世の中に、犠牲を好み、自ら無意味な犠牲者になりたがる人はいないだろう。大逆事件で処刑された人たちが、不必要な犠牲者だったか、止むを得ない犠牲者だったか、暴逆な国家権力によってひねりつぶされた犠牲者だったか、これをどう見るかはその人の近代日本史観を決定する重要なポイントであろう。自分も他人も犠牲にしない社会主義への解決策として鵬外がえがいた具体策は、中野重治のいう「天皇制社会主義？」とでもいうものになるのだろうか

か。天皇制社会主義は、言葉自身が矛盾した言葉であり、もし実現したとしても、社会主義とは似ても似つかぬものであったろう。そもそも社会主義などという抽象的な言葉は、うけとる人によってどのようなにも解釈出来る性格をもっている。唯物弁証法は、精神を物質に還元し、数式を解くように、社会を法則的にきわめようとする。その法則の根本は、階級対立がなくなれば、国や民族のエゴイズムは消え、戦争はなくなるという点にある。しかし今われわれが見ている現実には、社会主義国相互に行われている武力侵入であり、きびしい対立関係である。どの国が間違っているのか、社会主義を称していても本当の社会主義になっていないのか、そもそも社会主義の理論に誤りがあるのか、確実なのは、きびしい対立にある双方が、自国の社会主義を自認している、ということである。

何はともあれ、鵬外は十九世紀末のドイツに四年も留学し、社会民主党の動きにも直接ふれ、その集会へ顔を出したとさえある。明治十年代から社会主義の文献を読み、日本の当時の社会主義運動の闘志たち自身より、社会主義に対する深い知識と教養を持っていたと考えてよからう。しかし、教養、知識として深く高いものを持っていたことは、そのまま社会主義に同情をもっていたことにはならないし、本当に社会主義を理解していたことにもならない。まして、日本の将来に社会主義社会の実現を予想し、期待していたなどということにはならない。

『俗物』鵬外ということが、あらためて盛んになっているようである。鵬外の『堺事件』を歴史の偽造として論難する大岡昇平の長大な論文は、一見説得性を持ちやすいかもしれない（大岡昇平『文学に於ける虚と実』）。かつて、戦間的な松田道雄は、小説『高瀬舟』における安楽死の思想が、医者として許しがたいと述べたことがあった。大岡昇平や松田道雄の意見は、局面局面をとるかぎり、おそらく非のうちどころのないものにちがいない。だが鵬外・森林太郎は、彼を論難するひとびと以上に、近代日本の中心に生きており、彼の傷を血として流しながら再び立ちあがろうとしていたのであった。

『芸術の認める価値は、因襲を破る処にある。因襲の圏内にうろついている作は凡作である。因襲の目で芸術を見れば、あら

ゆる芸術が危険に見える。(中略)

学問だって同じことである。学問も因襲を破って進んで行く。一国の一時代の風尚に肘を掣せられてゐては、学問は死ぬる。』

〔沈黙の塔〕

と鵬外は晩年『沈黙の塔』に書いている。彼がこの作品をひさしぶりに鵬外の署名で発表したことは、鵬外と森林太郎が、ついに再び統一されたことを、何よりもよく物語っている。明治四十三年である。

明治四十三年は、しばしば言及してきたように、『大逆事件』の年である。林太郎は山県有朋の側に立って、社会主義者の転向と更生に乗り出そうとしていた年である。鵬外がこのとき、権力の意志に従順に従っていたとみるのは、しかし、やはり短見にすぎないのであらう。明治三十五、六年に日本国民の正義を代表しているかにみえた日本社会主義運動は、日露戦争を経ることによって、国民の運命と切り離されてしまっていた。日露戦争前の社会主義の要求は、国民自身のとめることのできない声の発現であつたのに対し、国民が日露戦争を支持したとき、日本社会主義はいかにそれが論理的必然であつたにせよ、国民自身から切り離され、敗北への道をたどらざるを得なかつた。日本社会主義は、明治十年代の自由民権運動と同じように、いわば、社会外から、日本社会の発展にさからう形で抗議することしかなかった。天皇暗殺計画の孤独は、計画者たる宮下太吉や菅野スガや幸徳秋水その人の孤独として定着されている。彼らには、絶望とあせりの暗い怨念が流れているだけであつた。」

〔反動との闘心〕

日露戦争を日本の国民は支持した。それを境に、日本社会主義運動は、国民の意志に逆らうものになつた。その現実を無視して、社会主義を説きつづけるものは国民から見離される、国民から見離されたものは、敗北し、孤立化せざるを得ない、というのが飛鳥井氏の論理である。敗北するにきまつているものに、鵬外が同情をもつことはあつても、それに組みする事はしなかつた、というのである。

一見もつともらしい論理のように見える。ただここで飛鳥井氏は、「国民」という言葉を使い、意識的に「庶民」とか「民衆」という言葉を避けている。「民衆」とか「庶民」という言葉には、主体性と自主的判断や感情をもった人々という感じがある。「国民」となると、庶民をも含めて国家権力に方向づけられた人々を意味するようだ。「国民」と呼ばれた時には、国家権力の意志に忠実な人々を意味する。その国民の意志に反することは、「非国民」と呼ばれることになり、国家権力に刃向かう行動に出れば、まず敗北以外にないのが現実であろう。それは飛鳥井氏のいうとおりだが、敗北とわかっていてなお抵抗し、批判をつづける態度が、単に徒勞で無益なことと言い切れるであろうか。

飛鳥井理論を逆に言うと、デモクラシーが流行して国民がその方向に向けば大いにその風潮に乗じ、軍部独裁政権の下に国民すべてが編成されればその流れに従い、民主主義が叫ばれば、もともと自分は反戦民主主義だったような顔をして生きるのが、賢いだけでなく、正しい生き方のように聞こえる。洞ヶ峠の筒井順慶よろしくの日和見主義こそがもっとも正しい生き方であると言っているように解される。

ところで、日露戦争には鷗外は第二軍軍医部長として従軍、戦勝とともに、功三級金鵄勲賞を授けられ、勲二等に叙せられ、旭日重光章を授けられている。凱旋してくると、他の将軍たちと特別仕立の馬車で、東京駅から宮城へ戦勝報告に参内している。高級職業軍人の鷗外としては当然のことであるが、反戦運動や戦争批判とは正反対の位置にいたことはたしかである。

だが、飛鳥井氏はそうした事にはまったくふれず、強引に次のように結論づけてゆく。

「彼の大正期に書かれたノートによってみて、林太郎は社会主義の必然性をほとんど信じていた。少なくとも社会民主党や、労働組合や、ストライキの必然性を信じていることには間違いない。

彼が晩年、枯淡の境地に至り、いわゆる史伝ものを展開することができたという鷗外論の俗説は、改めて批判しておかなければならない。鷗外が住んでいたのは、枯淡でもなく、『みきり』の境地でもなく、もつとどす黒く渦を巻くニヒリズムの深淵であった。

鷗外・森林太郎は、ついに一生、現実社会から身をひこうとはしなかった。わたしたちはこれまで、社会への批判者をしばしば安易に、栄光につつまれたものとして描き出しがちであった。中江兆民や幸徳秋水については、多くの人が書き、またわたしも書いた。だが、社会の現実のなかにとどまって闘い。血を流し、絶望の奥に追いこまれても闘うことをやめなかった鷗外の青春は、いまひとつの近代文化のあるべき姿をはっきりとさし示しているのである。(中略)

彼は、いわゆる史伝ものにおいても、日本近代のあるべき姿をたえず探っていた。『浜江抽斎』においても、またそれ以下の作品でも、なぜ彼は幕末、とくに天保期以後の儒学者にこだわったのであろうか。すでに見て来たように、『日本兵食論』『日本家屋説』の青春の著作で、彼はすでに日本の生活それ自身の中からの近代化の方向を模索しつつづけていたのである。一見『歴史其儘』にみえる鷗外の歴史小説は、彼の青春の希望と日本の現代をつなぎ合わせる最後の絶望的な努力だったのである。」

(『反動との闘い』)

中野重治の鷗外論にこだわりのながら、二十五年間鷗外文学を考えつづけてきた飛鳥井氏の到着したのは右のような結論である。中野重治が鷗外を高く評価しながらも、最終的には、極右翼の人、民主主義を抑圧する側の文学と結論づけたのを、飛鳥井氏は正反対に結論づけたのである。鷗外こそは、最後まで社会主義の必然性を信じ、もつとも現実に着したところから社会主義実現のための戦いを闘いぬいた人と見るのである。彼の歴史小説、史伝ものも、日本の伝統に足をおいて、あるべき未来の社会を考えようとしたもの、と飛鳥井氏は見るのである。

四

以上三種の全く異質な鷗外論を、私たちはどう考えたらいいのだろう。三種の評価は、全く見当はずれとは言えない論拠をそれぞれもっている。それだけ鷗外という作家がスケールの大きい、複雑な要素をもった存在だったということになる。又、どの評価にも当たっている面がある、ということは、どの鷗外論も全体の鷗外文学の的を射ていない、ということでもあろう。

一体に評論というものは、ほめるにしても、けなすにしても、評者自身の身にひきつけて、自分の理論を実証するに都合のいい部分だけを、作品の中から分離抽出して議論をすすめ易いものである。鷗外で言えば、自分の鷗外観が先に存在していて、その論証に都合のいいところだけを鷗外の作品から読みとろうとするのである。

評者自身の自己克服、自己批判のきびしさがすこしでもゆるむと、文学評論は自己弁解、自己擁護の論になってしまう。鷗外くらい多方面な活動を精力的にやってのけてきた人は、それだけいろんな議論を立てやすい、といっていだらう。おびたしい鷗外論の中から私の目にふれたもので、もっとも特徴的な三種類をとりあげ、どう考えて読んでいったら、いちばん正当な鷗外文学のうけとめ方ができるか、その可能性の手がかりを考えて見ようというのが、私の試みである。

まず最初の正宗白鳥、三島由紀夫、伊藤整を例にしてあげたのは、芸術至上主義的立場からの評価と言ったらいいだろうか。簡潔で力強い文体とか、口語文の完成、自然主義の限界を見通した上で構築された小説方法論としての新しさ、資料を駆使し、作者の自我を出さずに歴史をして歴史を語らせる史伝ものの方法としてのすばらしさ、しかも

そうした史伝ものの方法が他の方法の描き出すことの出来ぬ活き活きた人間像の創造に成功しているリアリズムとしての効果の大きさ。これらの指摘は尊重していい。これらの指摘は、うっかり読んでいれば見落としてゆく鷗外文学の芸術的価値の一面を私らに改めて気付かせてくれる。

だが、こうした傾向の鷗外論は、申し合わせたように、鷗外がどういう立場に立ち、誰のために、何をどのように描こうとしたか、という問題にふれない。鷗外が日本近代文学に対して果たした役割は何だったか。鷗外の文学が、現代に生きるわたしたちに語りかけてくるのは何なのか、という鷗外文学の本質にふれる問題をわざと避けているおもむきがある。そうした考え方をすること自体が、文学の自立性を犯すもの、という考えがこれらの鷗外論の根底にあるようである。

鷗外自身、作品「妄想」で、おびただしい読書の中で多くの師に逢ったが、そのあとに従ってゆくべき主には遂に出あわなかった、と主人公に言わせている。鷗外文学の中にわたしたちの主となるべきものがあるかどうかさぐり求める行為は、どろくさくやぼったい行為なのであろうか。

たとえ泥くさく、やぼったく、時には冒瀆の行為となっても、私たちは芸術の中に、師ではなく、主を求めつづけずにはいられない。その中に主を見出すことの出来ない芸術や思想は、しよせん私たちにとって内面的なかかわりのない芸術や思想にすぎない。

どこにも主を見つける事の出来なかった鷗外は、自分自身が主となる試みを試みるほかなかったのである。鷗外自身が主となって歩もうとしたのは、どういう道であったか。一言にして言えば、それは明治の日本をいかに近代化するか、の道であった。といえは、そんな事なら、「文学界」も、漱石も、新詩社も、自然主義も、白樺派も、当時のめばしい文学流派、文学者がひとしく求めたものであり、それぞれその人なりになしとげた事ではなかったか、と反

問が出よう。その通りである。ただ鷗外には、漱石も、二葉亭も、啄木も充分理解出来ると同時に、すべてに満たされぬ思いがあった。そこで鷗外は、鷗外独自の日本近代化の構想を描いた。その中から鷗外独自の文学の世界を創造した。それは、既成の文化伝統を破壊したり、無視した上で、まったく新しい近代をつくりあげようという行き方ではなかった。既成のもの、伝統的なものを大切にしながら、日本の伝統の上に、伝統に密着した日本独自の近代を育ててゆこうというユニークな主張だった。

「妄想」「かのやうに」等の作品は、その苦闘の過程を内容とするものである。伝統のいちばん根幹となるものは、「天皇」であり、「武士道」である。「天皇」という超論理的存在を問題にすることは、きわめて危険な禁忌事項になっていた。それを敢えてふれようとしたのが「かのやうに」である。「かのやうに」は成功したか。遺憾ながら作品として成功したとはいえない。主人公五条秀麿が長い苦闘の果てに構築した天皇制と近代との妥協理論は、友人綾小路に、にべもなく「だめ、だめ」と否定された形で作品はおわっている。

又、「妄想」の中で、自我の問題にふれ、いざという時にはいさぎよく切腹して果てる覚悟を幼時から教えこまれた主人公が、自分で自分の生命を断つことの苦悩を予想できないことに悩むところがえがかれている。肉体的生命の消滅するときは、当然肉面的自我も消滅する。その自我の消滅に苦痛を感じない自分には、西欧風な近代的自我は理解出来ないし、自我自体が存在しないのか、と主人公は自問する。そして最後には、そういう自分を、近代人でないとも西欧人に劣るとも考えない、と居直るのである。すべてが西欧人の考え通りでなければならないはずがない。日本人には日本人独自のゆき方、近代化があつていいはずだし、又それでなければ本当に地についた日本の近代化はありえない、という考え方がこの辺からはじまってくる。

日本的なものの再検討というところから、歴史小説や史伝物が次々と書かれていった。日本の伝統的なものをきび

しく吟味した上で、日本の近代化とは何かをじっくり考えてゆくということは、基本的にきわめて正当なことである。だが、鷗外の試みた方法が、木に竹をつごうとする滑けいなものにおわったか、地に足をおろした正しいものであったかは、見る人の見方によって大きく変わってくる。

中野重治は、鷗外文学に対する深い傾倒にもかかわらず、鷗外の方法は、人民の下からの近代化の要求を圧殺する方向をたどったものとして、きびしく批判する。石川淳は、中野重治とは鷗外文学全体に対する評価はまったく異っているが、「古い手帳」「大塩平八郎」等の中野重治が指摘したものと同質のものを読みとっている。

飛鳥井雅道は、中野重治の鷗外論を重視し、中野重治の鷗外論をまともに継承したものとしてその鷗外論を展開しているが、中野とは正反対の鷗外評価に到達している。最後まで社会主義社会の必然を予見し、その信念のまったく変らなかつた人として鷗外を見ようとしている。こういう鷗外評価は今までになかつたものである。しかし、よく読んでみると、その議論の展開はあまりにも強引であり、自分の理論に都合の悪い面はすべて切り落とした立論というほかはない。

たとえば、「因襲を打破しなければ、新しい芸術は生れない」という言葉は飛鳥井論文が引用している通りである。そうした言葉は、「旧来の陋習を破り、天地の公道に基くべし」といった形で五ヶ条の御誓文にだって使われている。鷗外が「因襲」と言ったばあい、その因襲の中味が何であつたかが問題である。少くとも鷗外にとって、天皇制や、主君に対する絶対的忠誠は、殉死や、敵討は美德であつて、打破すべき因襲とは考えられなかつたのではない。形はともかく、その精神は守られなければならぬ日本的なものの精髓と考えられたのではない。「興津弥五右衛門の遺書」以後の作品を正直に読めば、どうしてもそうとしか受けとりようがない。鷗外の作品が美しく澄んでゆけばゆくほど、それは動かしやうもないものになつていったのではない。

その鷗外文学の性格を鋭く見ぬいて、中野重治は、極右翼の側の文学と規定した。その規定がそれほど見当はずれのものでないとしても、規定の仕方が読者を納得させるだけの充分な論証の上に立っているとは言えない。自然語調が高びしやになり、きめつける調子になっている。その中野をうけついでと称する飛鳥井論文は、「社会主義の必然を予見した人」と鷗外を規定し、その信念と、社会主義弾圧に狂奔する国家権力を調和させようと絶望的な努力をした人、と鷗外を見ようとしている。それはある時期、そのような努力が鷗外にあったと言えようが、調和を目ざしたつもりの方が、結果的にどうなっていたか、はっきりと見定める必要がある。実証的な論拠ぬきで、抽象的な歴史観めいたものの羅列だけで、社会主義者鷗外を主張すれば、ヒステリーじみた空言にしかきこえない。

素直に読んでゆけば、鷗外文学はどうも飛鳥井の主張のようにには読みとれない。飛鳥井は、「大塩平八郎」における主人公の描き方を人は批判するが、かんじんなのは「大塩平八郎」を主人公になぜ鷗外がとりあげたかであると主張する。幸徳秋水と同じように、滅びに急ぐものとして大塩に共感したからこそ大塩をとりあげたのだ、という。関心があり、問題を感じたからこそ大塩をとりあげたのではあろうが、その事はそのまま主人公に「共感した」などとは、どう読みなおしてみてもそんな風には読みとれない。

中野重治の「鷗外その側面」が従来の鷗外論が避けて通ったところを、敢えて正面から鷗外文学の本質に迫ろうとした重要なものであることに私も異論はない。私たちが鷗外を読むときに、読みとったものが中野と同質なものになるか否かはともかくとして、もう一度私たち自身が、鷗外文学の中に沈潜して、そこから読みとったものにより、自力で鷗外文学の本質をひき出してくるはかないようだ。その際一切の既成概念を捨て、虚心に読むことが大事なようだ。又、自分自身の生ま身の生き方を棚にあげて読んでいるかぎり、鷗外文学の本質になどふれることは出来ないであらう。